



折口信夫（釈迢空）の芸術・学術

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道学芸大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 中塩, 清臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000879

折口信夫（釈道空）の芸術・学術

中 塩 清 臣

北海道学芸大学岩見沢分校国文学研究室

Kiyomi NAKASHIHO :
Shinobu ORIKUCHI (Chōkū SHAKU) 's Work

I

座右に在るところの〈折口信夫(釈道空)全集〉32巻は、わずかに折口信夫像の方尖塔でしかない。この底辺その基層が、どこまでのびひろがつているものか、ととてもとても測り知るすべがないからである。もし仮りに「釈道空」のフィールドをたぐつて、創作関係を処理してゆき、学術のトポロジーは折口信夫だけをもつて、認識しにかかるとしても、まず既成の類概念が、あてはまりようもないし、通俗の尺度ではどうにも、用をなさないためである。というのは単に国文学とか国語学ではない。加えて民俗学を方法論とし、神道学を演繹してきている。かつてこういう学術様式は、どうも日本にはなかつたものである。つまり空前にして唯一の精神エネルギー、するとやはり折口信夫は、〈天才〉とみとめるよりほかにない。なるほど人びと讃えて「折口学」というゆえか、ペンネームとしての「釈道空」は、明治43年(1910)10月10日発信の絵はがきに、現存資料のうちではじめてみえるところ(全集31巻)……。ときにかぞえどし24歳、7月には国学院大学の課程を卒えている。提出論文は「言語情調論」(全集29巻)だつた。古典語のイデオマトロジーをつきとめた前衛作業である。のちほど芸術化して、「古代感愛集」に結晶してゆく次元だ。というより折口学の座標軸は、なにかにより言語情調論から発している。大正2年(1913)3月におよび、柳田国男主宰して雑誌「郷土研究」がでる。まことこのモニュメンタルな史実が、折口信夫の運命図を決定づけた。いちはやく12月の郷土研究には、「三郷巷談」(全集15巻)をかかげている。どれくらいショックな肝銘を彫りつけたことか、「三郷巷談」自性のもつ価値が証明する。いつばうで現に柳田国男は、「折口信夫」という本名を目して、だれか達人の隠逸擬態——口を折つて忍ぶ——にちがいない、と思つたほどにおどろかしたという。すでにどこか完成したエレメントがあつたのだから。

一 其間に俄かに、一筋の白道が、水火の二河の真中に、通じてあるのを見た。柳田国男先生の歩まれた道である。私はまつしぐらに其道を駆け出した。けれども白道を行きつつも、二河のしぶきは、しきりなく私の身にふりかかつた。(「海山のあひだ」跋)

とにかくこれが民俗学の方嚮へ、ひたすらにすすむ主導契機となつて、「髻籠の話」(全集2巻)も送つたが、柳田国男に直接まみえたのは、2年もしてのちのことである。だから民俗学と対決して、遅疑 逡巡 をくりかえした経緯は、まざまざと読みとられるであろう。でもついに新渡戸稲造郎の郷土会例会にものぞむにいたつた。翌5年には万葉集20巻に、フォクロリズムを導入して全訳しおわる(全集4・5巻)。このとし国学院大学に、郷土研究会の創立をこころみる。みずか

ら主宰し7年8月、雑誌「土俗と伝説」の編集責任を負う。フレーザーの“Golden Bough,, を「金樞篇」として抄訳している。華麗な表現をととのえた日本初訳であろう。つづけて「独楽の話」をハッソンの著作からも……。民俗学史のうえで瞠目しなければならぬ事跡だ。あけて1月には国学院大学講師、ときとして「万葉集辞典」(全集6巻)が上梓のはこびになる。万葉集だけの辞典形成としても、まさしく先駆だったばかりか、民俗学の思惟を自在に、展開させて好典型をしめす。

前後のころしきりに東北へ九州へ採集に旅だつ。9年(1920)から10年にかけて、国学院大学で「民間伝承学」を講ずる。25年をへだてて昭和21年(1946)に、「神道概論」のカリキュラムを組むのと呼応するであろう。11年の夏のふた月、第1次琉球行にあてて、帰路は杵岐に転じた。「沖繩採訪手帖」(全集16巻)・「杵岐民間伝承採訪記」(全集15巻)が、そのおりのメモランダムである。11年4月に国学院大学教授、さきだつて1月に文学雑誌「白鳥」を発刊におよぶ。ここに「白鳥」と名づけているところ、折口学トポロジーの象徴がある。白鳥は靈魂のメタモルフォゼ。民俗学を超えて人類学からも…。14年に短歌結社「とりふね(鳥船)」をおこし、「くぐひ(鶴)」社同人の雑誌「くぐひ」を指導したことも、一連の系譜につながっている。白鳥も鶴でも鳥船にしても、本質は同心円のうえにある。明治33年(1899)13歳にして、雑誌「帝国文学」にのつた高木敏雄の「白鳥処女伝説」が、古代学に因む知性開眼の端緒という。してみると深層心理の機能によつて、定向進化をとげつつあつたことは、否めないケースであろう。12年の5月にいたつて、「世界聖典全集」外纂に「琉球の宗教」をかく。創作の感受をもつてして、沖繩を「をとめの島」とうたう。前近代のリアリズムをみている。昭和17年にした日本諸学振興会の国文学特別学会の講演「古代日本文学における南方要素」(全集8巻)への主導契機をなす。7月20日から第二次琉球行、それに前島列島の伝承をもとめて発つ。あゆみすすめて台湾におもむく。ルポルタージュは「沖繩採訪記」(全集16巻)としてまとめられた。昭和3年(1928)4月に慶応義塾大学教授、芸能史の体系化をはかる。ゆたかにみのり熟して18年4月、大日本芸能学会がうまれて会長の任に就き、監修して機関誌「芸能」をだしてゆくようになる。4年より5年にまたがつて、「古代研究」三部作を開板する。名著のはまれきわめて高く、すこぶるジャーナリズムをにぎわす。そのうちの万葉集研究を主軸とした論文グループによつて、7年3月1日付で文学博士の称号をうける。

ちようどこのころ大学に進んだときだつたので、どうしたら先生の学問をまなぶことができるであろうか、と不遜ながら捷徑についてうかがつてみた。すかさず「古代研究」全ページ、まる暗記しなさいといわれた。^{しようれい}10年もおしつまつて第三次琉球行をいそぐ。それで「万葉集総釈」巻14の脱稿に、連日深夜まで手伝つた。この年暦以後には採集の旅泊からもどると、想念を凝らす生活法を欲して、とりわけありあまる雑務より身をかくし、しいて戸をかたく閉ざしてひそやかに、それから箱根仙石原に山荘をいとなみ、「檉隠居」また「叢隠居」と称した。資料と実感と推理とが、交錯して発展するユニークなメカニックを、博士の立場はもつゆかりであろう。国学院大学では15年4月より、あらたに民俗学講座を設け、さらに民俗学資料室を整備する。日本で民俗学が大学の講座として、編組されたのはこれをもつて濫觴とする。つぎのとし「日本芸能史六講」(全集18巻)を版に活かす。民俗芸能の軌跡の脈絡を追尋した、わが国はじめてのプロレゴメナ。22年10月には「日本文学の発生序説」が単行本として……。国文学・民俗学・神道を習合し復融させた、稀有の理想像をかかげる。

還暦を祝うため雑誌「民間伝承」は第11巻の第10・11号を合併し、「折口信夫博士還暦記念特輯」を送り、民俗学界こそつて碩学の鴻徳をうたひあげる。「古代感愛集」をもつて23年5月には

芸術院賞を受けた。選ばれて12月に第1回日本学術会議会員に、ふたたび26年（1951）に日本学術会議会員となつて、死にいたるまで任に在つた。24年9月の日本民俗学大会で「日本民俗学の領域」を論じ、12月「民族学研究」に柳田国男との対談「日本人の神と靈魂の觀念」、あけて2月には「民俗学から民族学へ」……。この夏かけて「日琉語族論」（全集19巻）をしたためる。とくに文明批評精神の光芒が、ひろがりふかまりつつあつた確証にはかならない。昭和20年代わけても発想技法は長詩形をとりはじめたが一「近代悲傷集」・「現代襤褸集」一、それは戯曲にまでいそしむエネルギーとも、回転軸において渝るものではない。みまかる2ヶ月まえ「日本科学者名鑑」には、研究主題として「万葉集の基礎的研究」・「日本における靈魂信仰の研究」ふたつを申告している。窮極のところここへ帰一するのであろうか。28年9月3日午後1時11分、67歳をかぞえてとこしえに……。

誘因は文字どおり自他ともに不測の胃癌だつた。遺骨を能登羽咋の一ノ宮の海にのぞむ沙地に葬る。さすがに自撰の墓碑銘さえも、たぐいを絶して古今にも東西にもならぶものとなつてない。松かぜ颯颯としたところ童貞^{エビタマ}釈道空鎮魂の曲として、

一もつとも苦しきたたかひに、もつとも苦しみ死にたる、むかしの陸軍中尉折口春洋^{はるみ}、ならびにその父信夫^{のぶ}の墓。

分骨して大阪木津の願泉寺の累代の墓へ。としこえて2月には国学院大学に、折口博士記念会が結成された。「折口信夫全集」の第一巻が、中央公論社より29年10月に、それから巻帙をかさねること31、刊行は32年4月をくぎりにしておわる。やがてこの索引1巻が34年5月にまとめられた。だがまだ続刊中の32年2月28日、「折口信夫全集」は日本芸術院恩賜賞受賞に決定……。選考委員会があげて推挙におよぶとき、いわば没後の対象受賞として前例をみないものである。だからその人生条件この学術エネルギー、要するになにかもかごとくが、すべて普通と秩序を異にし、もちろん質量ともどもまるであらう。

II

道空の芸術工程

一 葛の花踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

処女歌集初版本〈海やまのあひだ〉の開巻第1の歌である。大正10年（1921）の夏にはじめて、壱岐へわたつての印象定着だが、発表はおくれて大正13年だつた。とりわけこの詠吟は、釈道のかぞえどし38歳を、記念する作品に値する。「葛の花……」にみちびかれる「島山」・「蟹の村」の連作は、ひとまず律文スタイルの表現に属するのであるが、散文化されたものにはルポルタージュ「海道」の砂、それから昭和2年（1927）9月の民俗学稿本「雪の島」があつた。大正10年の7月から8月に、一回目の琉球行をはたし、帰路は転じて壱岐にむかつたが、琉球へも壱岐へも比較研究を目的とした、フォクロア採訪のためである。12年5月に「琉球の宗教」が成立し「世界聖典全集」外纂に修められて、これが折口信夫の「日本文学の発生」諸篇の主導契機をいざなう。ふたたびその7月20日には、琉球および先島列島のフォクロアをもとめてたつ。これまでの踏索のプロセスを「古代研究」三巻に輯録する。またび沖繩へは10年（1938）12月15日から11年（50歳）1月23日のあいだ……。この舟航・空路の往還がもたらした絶大の効果は、民俗学の業績として「琉球国王の出自」一伊波先生記念論文集「南島論叢」一が、知性の好典型をかたどる。それよりも刮目しなければならぬのは、〈古代感愛集〉の基軸となつた「干瀬の浪」・「父

の島母の島」・「沖繩賦」・「古びとの島」の抒情詩篇を経て、「月しろの旗」（一藩主第1世尚氏父子琉球入りの歌1一）・「海の賓客」（一月しろの旗2一）・「佐敷按司」（一月しろの旗3一）の叙事詩篇三部作へ、つぎつぎ展開をあふりたててゆく連環作品の出現だった。

まったくこういう文学の形成工程は、古事記・日本紀の神代巻から、神武天皇のくだりへまたがる経緯と、たどる軌跡は同一である。古代語部の近代身証としての発想法にほかならない。近代随一の霊媒質のバトスのゆえであろう。琉球国の創世紀・沖繩史の序章が、鮮烈にして壮麗に昭和詩人の新感覚にうつしとられ、まことに未聞にして無比の幻をえがきだす。さかのぼつて昭和8年1月の「改造」にのせた、「大倭宮廷の崩業期」とも照応するメカニックであろう。もちろん詩と論文とでは、様式として成立時限においても、いかにもちがうわけであるけれども、ともにふたつにかよふ本質は、すこしもかわるところがない。資料と実感と推論とが、交錯して組織だつ独自の弁証論理である。民間伝承の採訪にあたつて、山村・海邑がたもつ古典感覚を、直截に享受し緻密に心象化させ、そういう生活法の回転軸に即して文献にむかい、つづいてさらに採訪の途次に、認識のかたちが総合的にまとまつてくる。つまり知性と事象との循環・即応に立脚させた新実証主義である。だから博士の学術操作は、必然的に発生論につらぬかれている。展開位相の諸契機をたどつて、関係秩序を追いもとめ証明づけることにある。とくに顕著な態度として、時空の脈絡を逆にさかのぼらせてゆくことである。所詮フォクロアの構造史そのものが、時空のたてよこを超えているからでもある。

それに人間というものは、精神を回帰させ追体験することが可能である。自己の精神生態をよすがとして、社会・民族・国家の史的条件さえ、そのひとつひとつの既往を透視し、それをそこで再現してゆけるのである。発生の順と回帰の逆とが、モンタージュするところの座標をめぐつて、古典的実存・歴史的現在を心象・事象の次元として、位置づけられるためであろう。したがつて芸術上の古代は、ある点で近代よりも近代風になるわけである。まして古代への感愛は近代の悲傷を前提とする。近代といどもたたかう文明批評が、ひらめかず眩耀である。流行と不易・退転と不退転、この思惟にもとづいて、抵抗も破壊も意義と価値とをもち、モラルとしてもうけとめられるであろう。人間のいのちが要請してくる新論理は、論理そのものからみちびかれるものではない。学術・芸術から誘致された内面律動が、社会的アピールや人間慣習の課題を意識し、そこからうちだされて具体化をとげた生活規範が、ひるがえつていのちの新論理をかたちづくるのである。

<折口信夫（釈迢空）全集>の31巻は、のちに「索引」1巻を添えて完結して、日本芸術院恩賜賞をうけるにいたつたが、すでに昭和23年には、処女詩集の<古代感愛集>が第1回の芸術院賞を得ている。全集の上梓中は発行部数のペースが、いささかもくずれなかつたという。ジャーナリズムのうえでこういう現象は、すこぶる異数の事跡ときく。けれども博士は存命のあいだ他にくらべて、あまりに報いられることはとぼしかつた。芳烈をきわめてかがやく英知は、その発想法までも独創特立して、風格が高踏でありすぎたから、とかく安易にさわがちな低俗の世間にとつて、つまりなじみにくかつたこともたしかにある。いつもふたつの大学一国学院と慶応義塾と一の教室は学生であふれていたが、博士の講義を聴きおわつて、とても心身つかれてぐつたりしたものである。まともに学問の情熱で灼かれたあとのところよさに、茫惚と魅せられきつてみた証拠である。

だがまるでわからないというつぶやきさえも、ときとしてささやきかわされていた。まさしく常識とか既定の類概念とかを隔絶していたからである。もうひとつには時めくアカデミズムと、

かけはなれているためでもある。博士の稟質が俊邁にして卓抜だつたばかりでなく、学術形成にとりあげた方法論は、「民俗学」というそのころ新しいだけに、多少とも不安がられた立場から、処理されて行つたゆえである。というわけはこれまでの国文学が、訓詁・考証にあるのでなければ、本文校訂にいそむよりほかになかつたのである。どこまでも文献至上主義の底辺を逸してはならなかつた。わずかに精神史か社会史かにささえられている研究があつても、たとえば鶏をさくのに牛刀をもちいたようなものしかないのであつた。だから多彩な才能発現ということが、すこしも緊要ではなかつた。ただここでハイライトが当てられることは、一にも二にも門閥のからくり・たてひきをめぐつてばかりだつた。実のところ学統と称して、因循はてしない排他よりみられなかつた。こういう学界の波浪の牙をねじふせながら、孜孜として<折口信夫（釈道空）全集>をきずきあげるためには、全生涯を童貞・単身でとじてゆかねばならなかつた。

III

嬢子塋

をとめありき。野毛の山に家ありて日日いで遊びき。血を吐きて臥し、つひに父母のふる国に還ることなかりき。稀々は、外人墓地の片隅にその石ぶみを見ることありき。いしぶみは、いと小さくてありき。さて後、天火人火頻りに臻りし横浜の丘に、亡ぶることなく、をとめの墓は残りき。

一ただ暫し、まどろみ覚むるかそけさは、若きその日の悲しみの如
一青空に 白き躑躅の散りまじり 時過ぎしかな。ここに思へば
一山ぎはの外人墓地は、空青に茜匂へり。のぼり来ぬれば
一くれなゐの野櫨の花のこぼれしを 人に語らば、かなしみなむか（昭和28年作・全集22巻）
モデルとしてこのおとめには、きまつた女性があることであろう。だが文学のヒロインとしてのおとめにとつて、事実の因由などはどうでもよい。それよりも「をとめ墓」の文学語彙ならば、「万葉集」巻3の「勝鹿の真間の嬢子の墓を過ぎしときに、山部の宿禰赤人の作れる歌……」（431）、また「万葉集」巻9・巻19にもあるとおりである。

葦屋の処女の墓を過ぎしときに作れる歌……

一いにしへの ますらをとのこの 相競ひ 妻問ひしけむ 葦屋の 菟原処女の 奥津城を わ
が立ち見れば… 語りつぎ しのびつぎ来し 処女らが 奥津城どころ われさへに 見れ
ば悲しも いにしへ思へば (巻9の1801・田辺福麻呂歌集)

菟原処女の墓を見る歌……

一葦屋の 菟原処女の… 垣ほなす 人の誂ふとき 血沼壮士・菟原壮士の…相よばひしける
ときは… 遠き代に 語りつがむと 処女墓 なかにつくりおき 壮士墓 こなたかなたに
つくりおきける ゆゑよし聞きて 知らねども 新喪のごとも 哭泣きつるかも (巻
9の1809・高橋虫麻呂歌集)

反歌

一葦屋の菟原処女の奥柩を往き来と見れば哭のみし泣かゆ (1810)

一墓の上の木枝なびけり聞くがごと血沼壮士にし寄りにけらしも (1811)

これに対してのちに、大伴家持の「処女墓の歌に追ひて和ふる一首」（巻19の4211）がある。「大

和物語」の147段から謡曲「求塚」一処女塚の訛伝—それに「艶道通鑑」へ、森鷗外の「生田川」・菊地寛の「慈悲心鳥」へおよぶ序列の原形質である。妻あらそいの伝説圏のうちで、縵児・桜児型から一転じてうないおとこ・ちぬおとこふたりの墓も、「処女墓」をなかにさしはさんであるとうたう屈折をもつ。こういう説話法のおとめは、古代の「神の嫁」—たなばたつめ（棚機津女）—の文学化した形象のほかのものではない。「簾子塋」のヒロインが、近代の悲傷を透して活かされているのは、いつてみるとリアリズムからである。ところがこの類縁をたぐるならば、博士の作品史にだけ徴しても先蹤がある。

門中瑣事^{プロト・タイプ}

…ここにも一人の男がある。…中年にして、門中になじみを深めて来た者であつて、私の懐く新倫理主義の拍子に、一つ鼓動を搏つてゐるやうに見えた。妻なる者は、久しく私の家の廚を預けた女子。一旦、私および彼の先妻の迂闊をひそかにわらひつつ、相かたらふなからひを、彼等が契るや、私は労役を意とせぬ忠勤の婢を失ひ、家を逐はれた人となつた彼の妻は、泣いて備後の山村に還らねばならなかつた。その後二年、また先夫人と同じ境遇が、後の妻の上に来た…。…妻なる女子の心は、純にして粗、都に住み馴れて、なほいまだ、安房の岬の潮の香を失はなかつた。無知に近い彼女の情念が、身のあるさまを、どう思ひ回してゐることであらう。

一をとめ子の守りしくりやは、蚯蚓鳴き 冬菜凍みつき、秋 冬を経ぬ
 一おもかげに たつふる里や。海風ぎて、今日しも 人は、潜^{カッ}きしてゐむ
 一もの知らぬ隣^{ヒナ}つ女を よしと 嫁^{カッ}ぎけむに。この 情濃^{カッ}き直妻^{チホツメ}を あはれ
 一をみな子は、すべなきものか。病みて子を産み、憑^{カッ}みし人は 家に来たらず
 一をみな子は、さびしかりけり。身の壮^{カッ}り ふみしだかれて、なほ 恋^{カッ}ひむとす
 一寝し夜らの 胸^{カッ}触る時の、身に染^{カッ}みて 忘れぬものを あはれと思へ
 一わが家のくりや処女は、赤ら類^{カッ}のすこやかにして、汝^{カッ}に思はれし
 一世の澆^{カッ}季の誠と思はむ。恋^{カッ}ひびとぞ もの言ふ時に、わなゝきにけり… (昭和2年・「春のことぶれ」)

「簾子塋」のおとめと「門中瑣事」のおとめと、まつたく別人であるとしても、同一人であつてもさしつかえない。「門中瑣事」の安房おとめは、石見おとこに妻問いされて、薄命の人間苦に働く。いにしえのうないおとめ・縵児・桜児は、神の嫁としての純潔維持・貞操証明のために入水・縊死し、うつし世の安房おとめは、人の嫁として神聖冒瀆・靈性失格のゆえに罪と罰とに哭く。近代悲傷は「肉」への凝視に発し、古代感愛は「霊」への憧憬に根ざす。だが悲傷とは否定・感愛とは肯定を意味しない。まして二律背反ではなおさらない。だから悲傷というのも、アイロニーにすぎない。それで感愛と名づけるのも、パラドックスであろう。文明批評精神のおもむきいたすところにちがいない。近代人としての古典学泰斗の当然の帰趨であろう。

古代エネルギーの具象ケースは、アメリカ占領統治のはじまる最近まで、琉球の生活様式のうちに蔽存しつづけていたのである。そういう琉球が「をとめの島」として、諷詠されている来歴は明白であろう。

地べたから10歩20歩、深いになると、4・50歩もおりねばならぬ水汲み場さへ、稀ではない。降り井^{カッ}・穴井^{カッ}など、方言ではいふ。

一をとめ居て、ことばあらそふ声すなり。穴井^{カッ}の底のくらき水影^{カッ}

一処女のかぐるき髪を あはれと思ふ。穴井の底ゆ、水汲みのぼる
一島の井に 水を戴くをとめのころも。その襟細き胸は 濡れたり
一島をみな、戻りしあとの静けさや。縁の明りに、しりのかたつけり
「海山のあひだ」

（大正10年・

羽衣綺譚スワロ・メイドン・タイフ一白鳥処女説話（くぐいおとめのものがたり）一の現実ではないか。「門中瑣事」の安房おとめの、はるかに未生前のものであろう。古代にさかのぼるほど、水汲むほとりが、神人相婚・霊肉合一の場として、羽衣綺譚発生のタイミングをもつ。けれども「万葉集」の作品構造でさえも、こういう天人女房の時空をうたつていてのではない。それより後代のいとなみをみつめている。してみると純客観の態度におさめてある。つまりクラシズムからリアリズムへ…。ところでもう万葉びとにとつても、文学でしかなかつたものが、なお「をとめの島」琉球では、日常の生活規範だつた。さらに作品路線をたぐると、「門中瑣事」の以前が設定されている。「をとめに誨ふ」・「石見の国」の吟唱である。すこぶる組歌化の機能をふかめ、叙事詩風の構成をつよめている。

をとめに誨ふ

一阪のうへに、白くかがやく 町の屋ね。ひたぶるにわれ 人を憎まむ
一ゆくりなく 電車どほりに 出たりけり。我は あゆまむ。面オモテ ひたあげて
一下婢をとりて 往にたる門弟子モンヂシも、あやまりて来よ。のどけき 此のごろ
一人みなうとみに馴れて 住むわれを。をとめはしたも、そむき行きけり
一をとめ居て、起ち居 寝し居間を見たりけり。あはれに結へる 残り荷の紐…

石見の国

一瀬磨ニマの海 磯に向ひて、ひろき道。をとめ一人を おひこしにけり
一家群なき 瀬磨の磯べを 行きし子は、このゆふべ 家に 到りつらむか（「春のことぶれ」）
いま石見国瀬磨郡の海岸に菟原の地名がある。「…をとめ一人をおひこしにけり」・「…行きし子は…家に到りつらむか」という発想法には、万葉のうないおとめの古典幻想がモンタージュされている。現実のおとめであつたとしても、同時にうないおとめの化身であろう。むしろこのメカニズムそのものは、自他統一・主客未分の心象風景というよりも、道空の視界に点じられた白日夢であろう。時間の関係も空間の位置も抽象化されている。虚実ふたつの映発するところ、ここに創作の愉悅がひそむ。そういう表現内容は、「孃子壺」の連作中の後段と、まるで没交渉であろうか。

一日本の浪の音する 静かなる日に あひしよと 言ひはるものを
一我つひに遂げざりしかな。青空は、夕かげ深き 大海の色
一赤々と、はためき光る大き旗一。山下町の空は 昏るけど…

かならず副意識において承接し合うもの、ちょうど地下水みたいに通ずるものが、成立時限をへだてて脈絡たがいに、一貫していることはあきらかである。共鳴腔はひとしいとみることもできるであろう。また性格が「孃子壺」とはちがうけれども、処女の死をうたいあげる葬送曲として、旧作にかかるものはある。

め ひ

私の姉なるその母と、11・2の頃から、私の生家に来てゐた女姪福井富美子は、去年女学校もすまして、今年19になつてゐたのであつた。

一わが家のひとり処女の、常黙すさびしきさがを 叱りけり。わが
 一をとめはも。肩の太りのおもりに、情づかず見えし その後姿はも
 一われの家にをとめとなりて、糾ね髪 たけなるものを 死なせつるかも
 一茨田野の水涌き濁る塚原を、処女の家と 思ひ堪へめや (大正8年・「海山のあひだ」)
 改造社版<海山のあひだ>で「処女の家」とあるところを、養徳社版「迢空歌選」では「処女
 の墓」になつている。ことに「茨田野の…塚原を、処女の墓と 思ひ堪へめや」の声調と修辭と
 をみよ。それに茨田といえは、さして菟原から遠いところではない。なるほどうつしみが、まさ
 目にうけとめている実存であろう。けれどもこのセッテングは、古典幻想を溶明させた二重構造
 の演出ではない、とだれがどうしていきれよう。迢空芸術の批判に馴された直観だけが、こ
 ういう因子分析をゆるすであろう。

IV

一 ゆふぐれは雲のはたてにものぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて (古今集巻11の484)
 一 いまぞこれ入日をも思ひ来し弥陀のみ国のゆふぐれの空 (新古今集巻20の1968)
 小説<死者の書>のヒロインは、恵美朝臣の姪の横佩家の郎女、神さびた常処女としての 齋
 姫、つたえていうところの中将姫である。もつともはやく大正10年ごろ、中将姫を主題とした
 <神の嫁>、という短篇未完のものがあつた(全集24巻)。その結集板として20年のちにまとま
 ってきたのが、やがて<死者の書>となつたわけである。だが<死者の書>がたもつアイデアは、
 やはり大正10年の創作詩篇<おほやまもり>を原形質とする。それは<古代感愛集>の一部とし
 て、おわりのところに収録されている。「山越しの弥陀」へ転化したのは、中将姫を介して日想観
 におよび、それも二上山のふもと源信僧都のふるさとが、地縁・血縁おなじ飛鳥びと釈迢空のノス
 タルジヤを熾烈におびぎよせたからであつた。なにかによりまず中将姫とは、靈媒質としての
 聖処女のことである。中将は中乗とも中寿ともするす。さて中寿とは、千寿・万寿・安寿・力寿・
 愛寿・清寿・覚寿…、とよぶような唱導派の女性宗教家のひとりである。巫祝を意味する「中乗」
 (中告)から「中居」→「中(仲)居」と名実ともにつり、しだいに男性の役儀としてもおこ
 なはれてゆく。べつに男性ならば、…阿弥陀仏…阿弥陀…阿弥…阿といつて権化のこ
 である。表記法を「中将」に定着させると、武官職として解釈づけられるようになり、たとえば「在
 中将」(「更級日記」)・「在五中将」(「狹衣」とか、「実方中将」(「枕草子」・「実方朝臣集」と
 か、紀伝風にもとのえられてゆく。伊勢物語の発生の根基にかかわるであろう。まさに女性靈媒
 をさして中乗姫から中将姫へ、ひとり横佩家の郎女に局限されるものではない。だが横佩家の郎
 女へ託してきている伝承でさえ、曼陀羅縁起はじめすでに故事旧聞に属する。虎御前の類概念と
 して、化粧坂の「少将」もこの巫道の序列…。もとより神語→詔勅のことにあずかりつかさどつた
 ところから、「中書」にも擬するし「中務(なかつかさ・なかのまつりごとのつかさ)」にもあててい
 る。ゆかりをとどめるいくたりかの中務のうちで、「中務集」の中務とか「中務内侍の日記」の中務
 は、後官女房としての面目ことにいちじるしい。また宣旨の管理が「中納言」(なかのものまうすつ
 かさ)へも、「中宮職」(なかのみやのつかさ)へもわかれて行つたが、帰する宗教事態はひとつであ
 る。神道のうえの中乗が、空也派の中寿としても、分化した軌跡の論証は、決して不可能ではない。
 一聖道者…衆徒・阿闍梨・別当・児・御童子・行人・山伏・中方以下之法師… (「化城咲具」)
 古代の聖処女は水涌くほとりて、天上の神一いつも男性と思惟されていたところの一出現をま
 みる

ちむかえていた。神代巻の忌機殿の秘事の秩序に属する。だからあの記紀の海祇の宮の井の物語から、「妹背山婦女庭訓」の杉酒屋の段の井戸がえまでもふくめて、こういう伝承路線につながる心意授受が、中将姫の曼陀羅縁起の形成へのモチーフをそだててきたのである。つづいておとこ神を、色身の幻「山越しの弥陀」へ、移調させるフィクション工程にしても、史的必然にもとづく文化変容である。つまり後期の「山越しの弥陀」とは、前期の常世のまればと神の転生異形であろう。日の神信仰ともなう水の常処女の霊性が、日本の女神の聖格をかたちづくつた日の神の使徒一日奉部・日置部一が、「聖」→日知（ひじり）となつたのも、浄土教へ習合・溶融してのちである。衣を貸すエピソードは、棚機まつりの民俗にからまつている。近代日本の〈死者の書〉が、古代エジプトのそれにもかよい、漢土の「穆天子伝」のおもむきをもただよわせているのは、詩人博士の賦稟をつらぬくエクゾチズムによる。すると中将姫の人間像に、紀元前ヨーロッパの巫女のペイジョンがない、とはいえるであろうか。また嬢子塋のおとめは、ピラミットの底ふかく常臥す、たわやめのパリエーションではない、と弁白できるであろうか。

短歌遺稿

一みつまたの花は咲きしか。静かなるゆふべに出でて 処女らは見よ
 一よき恋をせよ と言ひしが 処女子のなげくを見れば 悲しがるらし
 一戦ひのやぶれし日より 日の本の大倭の恋は ほろびたるらし
 一戦ひに破れしかども 日の本の 恋の盛りを 頼みしものを
 一戦ひの十年の後に 頼もしき 恋する人の上を 聞かせよ
 一銀座よりわかれ来にけり。一日よき友なりしかな。はろけき処女 （「短歌」創刊号一釈道空
 追悼篇抄→「倭をぐな以後」）

焚きあまし

一この里のをとめらねり来。みなづきの 夕かげ草の ほのぼのとして
 一おもふことしばしばたがひ、おきどころなき身暫らく 君にひたさる
 一こちよればこ、こちにとをより なづさひ来、ほのに人香の。身をつつむ聞
 一わが恋をちからにたてし 天つ日の、まのあたりにし おとろふる 見よ

（「海山のあひだ」）

「短歌遺稿」と「焚きあまし」との関係は、釈道空の文学史として、あたかも出発点と到着点とをむすぶ位置づけをたもつ。ときに年次をへだてること50年におよぶ。けれどもふたつの組歌を綾なすメカニズムが、すっかり同質ではないか。すべてどの作家でも、処女作へむかつて発展する、ともいわれているが、折口信夫の作品軌跡に徴して、ことさらにそういう確証をふかめることは、すこぶる可能であらう。まず遺言にもひとしい歌の主題が、「…処女らは見よ」と言問い、「…大倭の恋はほろびたるらし」・「…日の本の恋の盛りを頼みしものを」となげかい、「…恋する人の上を聞かせよ」とこいねがい、「…よき友なりしかな。はろけき処女」とおもいをひそめている。青春の無限漂泊が夢みた涅槃那のすがたであろう。まして「この里のをとめら…」・「わが恋を…」の旋律にしても、息づまるばかりのあこがれなのであつた。〈近代悲傷集〉の「天つ恋」・「やまと恋」・「世代の女」の詞華としても、やがて結晶してゆくものである。そういう定向進化の系譜図は、道空の聖処女思慕をもつて根幹とする。母系家族のうちに生いたちをした、環境からの機制にちがいない。これでその終焉まで孤絶の童貞に徹しきさせたのである。〈死者の書〉の中将姫は、ダンテの「神曲」のペATTRI-CHE、シェークスピアの「ハムレット」のオフ

エリア、ゲーテの「ファウスト」のマーガレットと、同心円のうえにかさなるであろう。だがまぎれもなく逡空が、ダンテともシェークスピアともゲーテとも、はなはだ異質のものであるところは、文学に破戒のパトス・罪悪のロゴスがないことである。窮極のところ神道とキリスト教との座標軸のちがいに、もちろん根本要因があるわけだけれども…。

V

独逸には生れざりしも

一あはれ 我がめづる
りるけの集一。

ひとの集ゆゑに 悔いなくて、
我は読みけり一。
この年の いたるまで一。

この年にして なほたのし
りるけの集。

ひとの集のよろしさ一。
悲しめど、悲しみ淡く
よろこべど、むさぼることなし。

若き日のぼへみやを 悲しめる
歌こそは、あはれなれ一。
麦の原に 木立ちまじり、
風車 青空にめぐる一…
あゝ音や一…時過ぎてなほ 聞え、
見わたしの国原は、
鬢クニツカに 人を哭かしむ。
オモカガ

どいつには 生れざりしも、
我は知る。りるけの愁ひ一…
我は知る。りるけすら思ひ得ざりし
ちえこ・すらばきや人の
とこしへなる歎きを一

(「近代悲傷集」)

リルケへこころゆきふれたことも、アドニズムのけはいからナルチズムのたたずまいへ、ついにストイニズムのいずまいに、ともにひとつ回廊をあゆむものだからであろう。だがリルケをこめて泰西の異邦人とは別途に、東方のせまい門いくつかくぐりぬけて、逡空がいたりついたのは「艶」の境涯だつた。とくに還暦をすぎてからの創作は、この「艶」といわれるものの近

代の好典型として、ひときわ若やぎまさり花さびてゆく。

一あゝひとり 我は苦しむ。種々無限清らを尽す 我が望みゆゑ

一車より降り来し女 美しき扇のうへの 秀でたる眉

一まさをなる林の中は 海の如 さまよふ蝶はせむすべもなし

このような純一かがよう静謐の浄らかさは、歌の「円寂」の至上境であろう。客観から主体へ回帰させて表現したときには、

きずつけずあれ

一わが為は 墓もつくらじ。

然れども 亡き後なれば、

すべもなし、ひとのまにまに一

かそかに ただ ひそかにあれ

生ける時 さびしかりければ、

若し 然らば、

よき一族の 遠びとの葬り処近く一。

そのほどの暫しは、

村びとも知りて 見過し、

やがて其も 風吹く日々に

沙山の沙もてかくし

あともなく なりなむさまに一。

かくしこそ一

わが心 しづかにあらむ一。

わが心 きずつけずあれ (「近代悲傷集」)

歌と詩とふたつながらの巨匠うつしみの鎮魂曲、それも自撰の墓碑銘であつた。〈海やまのあひだ〉にさすらいつづけた羈旅の哀愁も、〈春のことぶれ〉におよんで人生の春・芸術の春・理想の春をいわいことほぐ寛容へ、さらにすすんで〈水の上〉・〈遠やまびこ〉にかけて四諦へ、いざなわれてゆくのであつた。あまつさえよわい延びまさるにつれて、むしろいともあえかにしらべは幽に、ゆめともうつつともなく艶だち花めく深さ潤さ喬さ…。認識の角度のとりかたから技巧の処理のしかたまで空前のもの。それをもつて磨ぎ澄まされた解析をほしいまゝにし、周密にして強靱な構成をあまねくして、鮮麗かぎりもなくうづまきひろがる情念は、絶後のものでさえもあろう。けれどもそういう芸術エネルギーの全量は、歴史の諸条件との激しい敵しい鋭い対決の結果として、みちびかれたくわえられたものであることはいうまでもない。

たえず流動しつねに拡散しつづける、明治以後の離反の生活事実のうえに、辛うじて人間の立

場をたしかめ、ささえたもとうとする平衡感覚の究尋が、釈迦空の芸術をかたちづくる。どうかすると比喩というものは、本質をはぐらかしがちであるけれども、しいていうならあたかも、歌舞伎の一博士は「伎」をもちいることはなかつた一演出のひとつ、「見得」にかよところの構造をかたどる。さらにまた動詞で「極まる」ともいつている、かの瞬間だけ進行を静止させて、最大級のすがたとして、印象づける方法へも通じている。連続のなかばで非連続のカッティングを、ととのえてみせるところに、こういう状況設定がもつ、生彩な効果の計算がある。この非連続のポーズとは、批判であり肯定でもあり否定でもあるし、もつと混沌未分の喜・怒・哀・欲でもあろう。それを単に事象としてえがきわけるのではなく、心象としてかもしだし照り映えさせてゆく。つまるところ「間」の追窮にある。日本の芸能・芸術のうちで、品位けだかく格式もふるい、とみられているものほど、「間」というものの無限を闡明している。日本芸能史の組織化のパイオニアにして、最高権威者である折口信夫が、深奥に体認して得た、絶佳玄妙の顕現にほかならない。すでにこうした優雅な覚知の精神のありようは、たたえて「花」と称されているとおりである。

これからとりわけ新規の律文様式として、釈空の作品ことごとく特異の句読点をもつ。独自の Syntax なり Accentuation なりをあきらかにするために、呼吸や思想の休止点をしめす必要からである。ことばとことばの調子とを、的確に文字にうつしとろうとするならば、漢字と仮名との配合どころか、字画の感触にまでも神経をはたらかし、ことになにかによりも自己の内在律を、卒直に表現しきるためには、現代の言語芸術家として、とりあえず一千年を超える短歌史のゴーストと、とりくみたたかわなければならなかつた。くまなくゴーストの正体は、博士にとつて、掌をさすように、わかりきつていたわけである。それだけにゴーストの「悪」を、明るみにつかみだして、たたきふせなければならぬ。と同時に先覚者の責務としても、これにかわる課題解決をはかつて、当然むくいなければならぬ。それで機宜の方便として、句読法にこころを労することを、てはじめにしたのである。

一其は、歌の様式の固定を自由な推移に導く予期から出てゐる。五七五七七の形を基準にして、書きもし、読み下しもする為に、自然の拍子は既に変つて居ても、やはり句跨りと思ひ思ひ、読んだり、感じたりしている。此は表示法から来る読み方の固定なのである。私どもはどうしても、此だけは、我々の時代の協力によつて救ひ出さなければならぬ。歌の生命の為である。我々の愛執を持つ詩形の、自在なる発生の為である。 (「海山のあひだ」の跋)

もう第一歌集からテーゼは実践している。様式に即しての操作ばかりか、すすめてしきりに本質改造を、翹望してやまなかつたのは、必然のことである。島木赤彦の死・大正天皇諒闇に於て、昭和を迎える夜明け前のことだつた。ひきつづいて有名な警告としての短歌滅亡論を放つ。これにさきだつアンチ・アララギズム活動どころではない。アバン・ギャルドのほこりすがすがしく新時代の風雲に乗り、炬火たかくかざし笛ほがらかに吹きつづけた。それはいのちを賭けてしりぞかなかつた、雄壮な強行突破だつた。

一私は短歌の滅びることを言ふたのは、愛著更に、新しきが為であつた。明日の文学を思ふからであつた。更に新しい論理開発の職能を思ふからであつた。誰を激励しようとも、呪咀しようとも思はなかつた。個々の作品の問題でもなかつた。けれども誰か、心から同感して、相共に哀愁を催してくれたであらうか…。 (「辻談義」)

さそつてこういう憂慮に沈めてきたものは、つまり愚昧な歌壇の没知性だつた。古典詩形の滅亡をさげふのも、別離を惻隠してやまないからである。敗戦直後の桑原氏旋風にまきこまれた主張が、まさしくすべてそうであつたように、定見のないニヒリズムから、いたずらな呪咀・否定

を、こころみるようなことが、どうして釈博士にとつてできるであろう（「世々の歌びと」）。

歌に悶悶することの自省のあまりに、ともすれば感溺へ脚を、うばわれがちなのを踏みかまえて、歌の過現未をくわしく作図し、つぶさに可能を思料して、生命示標をうちすえたのである。だから徹底した科学主義により、峻厳な知性開眼にもとづく。

一道なかに 人かへりみずたちつくす 道祖神と われと さびしと言はむ

（「春のことぶれ」）

VI

歌に口語発想を実験して、四句駢体の短詩形をみいだし、短歌から派生したなげぶし、その変化のどどいつ・よしこの、また沖繩の琉歌までも、これとおなじ形式であることをおもひあはせて、とどのつまりそういう短詩形が、短歌から口語律の小曲を、発生させる主導契機になるであろう、と確信してきた。歌の本質成立の史的展開を跡づけてきたところの帰納として…。大正12年の沖繩行につづく、関東大震災後の感じ方考へ方の縮尺である。10数年して昭和11年の琉球印象が、＜古代感愛集＞形成の回転軸としての「干瀬の浪」・「父の島母の島」・「沖繩賦」・「古びとの島」の連珠から、「月しろの旗」・「海の賓客」・「佐敷按司」の三部作へ…。抒情詩から叙事詩のプログレスへ…。ところが日本に敗戦降伏という未曾有の現実が、もしもなかつたとするならば、道空がたどつた文学上の転機は、すくなくともこの第一次・第二次をかぞえただけにちがいない。けれどもここに第三次をみとめなければならぬ。のちにあらたに＜近代悲傷集＞が、国家・伝承・時代の諸経緯をくぐりぬけて、昭和のいのちの慟哭を華麗たくいなく、うたいはなつようになったわけである。それも急角度に作品のメカニズムも、年輪の全円くるめくばかり晃蕩をそよい、たとえば118行をつらねる口語の「暗渠の前」の長篇としてさえ、あらたな局面をみせてきたのである。まとめられて繚乱の花環が＜現代襤褸集＞となる。

「新体詩抄」このかた近代詩・現代詩の基盤は、古典との断絶・拒否に設定されてきているけれども、釈道空の芸術エネルギーは、古典の翼にのつて近代・現代を翔けぬけてゆく。すこぶる唯一無二の超人として、時空の意識からだけで律することができないものがある。

一私は文学の目的を、人生に於ける新しい論理の開発と言ふ点に据ゑて居る。韻律文の本質問題に就いて、この点に関心を欠いた従来文学論の価値を疑ふて居る。殊に求心的努力を、観照と表現上に要する短歌に於いては、文学価値が専、此点に繋つて居る様な場合が多い。私は「発想」と言ふ語に深い用語例を持たせてある。類型に陥ることの多かるべき短詩形に於て、特殊性をおし立てる道は、この「発想」に抛らねばならぬ場合が多い。個性表現と言ふのは、個性に由る論理の展開を意味するのである。其が根柢となるものは、求心的な精神活動である。…

才子必ずしも新論理の開発に適してゐるとも言へないし、又此才分の発露にも遅速あることも、事実である。才子は鈍根に還れ。鈍根者は唯求心努力に専念なれ。我々の歌は、才を超越し論理を解脱して、新たな価値を闢くものなのである。（「鳥船」第一集）

昭和15年には紀元2600年を祝うため、JOAKより委嘱されてかきおろした長唄「飛鳥」がある。稀音家浄観が作曲して11月10日の夜に、吉住小三郎によつて放送された。この発展形象として交響組曲化したのが、27年11月に新橋演舞場で東おどり上演の「万葉飛鳥の夢」であろう。べつに抒情詩篇の「飛鳥の村」もある（「古代感愛集」）が、「万葉飛鳥の夢」は日本の律文学史にてらし

てみても、まこと匹儔をみないものである。くりひろげられる瑰麗のテクニクは、日本語がもつ機能の極限をしめす。

—…飛鳥風、四方に響きて、吹きおろす、音のさやけさ。

野のすだま、山のこだまも、声やめよ。音のさやけさ。…

日の本の、やまとの国の万葉の、古きしらべは、よみがへる、ああ、よみがへる。

大空を渡らふびびき、うちとよむ、あはれ その音を聞け。…

(「万葉飛鳥の夢」・序曲)

すべて霊媒質のバトスのアラベスクである。とかく年次をわけて古代・現代の区画をしがちなものだが、それはコンベンショナルリズムとみるよりほかにない。古代も現代も均形等質のもの、ともに同心円の軌跡をめぐるものとして、うけとめてゆく態度である。ましてひとつ次元のことがらとして、形成工程の可能な方向軸がある。超論理・先論理に属している。愛の本質にもとづくものだからである。古代と現代との絶縁は、愛の喪失を意味する。わけても飛鳥の風土は、遼空博士の肉体のふるさと、はるかいのちの創世紀を夢みるのは、文学としても人間としても、やはり必然でなければならない。それに神道をきわめ古道にのつとり、そこから生活の新論理を、実現させようとする道統をつぐゆえに、いかにも自明のことであろう。学術としての〈古代研究〉も、芸術としての〈古代感愛集〉でも、ひとしく遼空の stigmatism にほかならない。それにしても博士みずから、とりわけ民俗学によるところがなかつたなら、これほどまでにみごとに、知性感性かねてふたつながら、花ひらかせ実をむすばせるてだては、なかつたかもしれない。とにかくにも現代において理論をもたないということは、なんとしても耐えられないことだから。

成立は挽歌である条理のない作品でも、葬儀の場でそのひとの朗詠吹込のレコードを聴けば、どれよりも挽歌のように聞きとられるものである。幽明二元のあわいをまさぐろうとする心緒にとつて、ひとしおこのおもいふかいものがある。「万葉集」巻二・相聞の山たずねの歌が、ことさらそういう実存感へいざなうためでもあろうか。それでその歌は、

一葛の花 踏みしだかれて、色あたらし、この山道を行きし人あり

Ⅶ

源氏物語の発生学

1 伝承と創作と

一さてこの源氏、つくりいでたることこそ、おもへどおもへど、この世ひとつならず、めづらかにおぼゆれ。まことに仏に、申しこひたりけるしるしにや、とこそおぼゆれ。…凡夫のしわざともおぼえぬことなり (「無名草子」)

日本文学の古典の軌跡は、すべてそうであるように、現行本の「源氏物語」にしても、数次にまたがる形成工程をもつ。まず内証方法として文献学から、とりわけ本文批評によつて、こういう認識のしかたが可能になつたわけである。と同時に外証方法として民俗学の立場から、この作品の書契化以前および以後の関係とか交渉とかも、構造的に推原し整理されるようになってきた。

作品の内証方法には、やはりそれはそれだけの限界がある。そこで外証方法がとられてくるのは、必至のことがらにちがいない。ことに民俗学のうち言語伝承論が、組織だてられるにつれて、それを媒質にして作品のメカニズムを分析し解釈をこころみ、その成立の根源意識の探索にまでもふかまるにいたつた。このとき先人未発の部門を截り啓き、研究史のうえにエポックを劃した学術体系は、<折口信夫（釈道空）全集>32巻にほかならない。

一 いづれの御時にか、女御・更衣あたまさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり…

…ひかる君といふ名は、高麗人の愛できこえて、つけたてまつりけるとぞ、いひつたへたるとなむ。 （「源氏物語」桐壺）

一 光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎おほかなるに、「いとど、かかるすぎごとどもを、末の世にも聞きつたへて、かろびたる名をや流さむ」と、しのびたまひけるかろへごとをさへ、語りつたへけむ、（イ語りつたへたる）、人の物言ひさがなさまよ…

…若くなつかしき御ありさまを、うれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりは、なかなか、あはれにおぼさるとぞ。 （「帚木」）

ひとまず「桐壺」も「帚木」からも、原文のはじめとおわりとを抄く。作品としてもつレーミングの典型を、みごとにかたちづくっているからである。竹取物語で「今は昔、竹取の翁といふものありけり。…」をうけて、とじめを「…とぞいひつたへたる」とつけ、伊勢物語・大和物語に「昔、男ありけり。…」というような、人物設定のしかた・時相規整のありようを、温習しているわけでもある。してみると源氏物語の巻帳ごとのレーミングは、今昔物語のかきだしが「今は昔…」、「…となむ語りつたへたるとや」をむすびにしているの、この名をよばれている経緯と、ひとしいペースをたどるものであろう。

けれども今昔物語と源氏物語とでは、存続のいきさつがちがう。今昔はフランス語でコント・ポピュレール（民間説話）—英語のフォーク・テイルズ—といっている範疇のふでうつしだし、源氏はコント・リテレル（文芸説話）という系列につながるものをへている。ただふたつともにかよところの問題楔子は、かきだしとじめとが照応し映発してゆく様式、つまり作品形態が額縁・箆め框を擁していることである。だが前と後とからつつまれながら、内側はどのようにでも、文芸化の新機軸をゆるしてゆく。したがって<伝承>と<創作>とのからみあう生態が、文化変容のポレミックをはらむのである。

源氏物語を純創作とみとめるところに、特定の作家個性がうかぶであろう。もとよりそれには紫式部が、これまであてられてきている。だがプログレスは、終始してそうだったであろうか。ひとりの紫式部の執筆の完成によつて、源氏物語が現行本のかたちをたもっているのではない。王朝の貴族階級をあげて、女房群から隠者層までをふくむ、非特定の複員こぞつて、かきうつしながら修訂をほどこし、改削につとめてきたのである。ましてこのころには読書は、転写のほかになかつたのだつたし、教養範囲もまったく同一であつたのだから。なによりもおびただしいばかりの異本派生が、それをつぶさに実証しているし、いくたりかの作家推定についてなら、考証学・訓詁学があつかつている。

2 紫の上系の認識

すでに源氏物語は紫式部プロパーからはなれて、共同制作の場につつされている。だから成立史に関しても「桐壺」と「帚木」とのあいだに、「かがやく日の宮」があつたともいう（「源氏物語奥入」）。たしかに断層がよこたわつていることは否めない。はるかの中に本居宣長がしたためた擬古の「手枕」は、「帚木」につづける目的からだつた。「匂宮」・「紅海」・「竹河」の三帖はうたがわれている。

- 「弘安源氏問答」にいふ、…世にあまねきところ五十四帖、いま六帖は雲かくれの巻にありといへり。このほか清少納言がつくりそへたる巻々「さくら人」・「さむしろ」・「すもり」、…
 （古本「山路の露」識語）

「さくら人」・「さむしろ」・「すもり」を、清少納言がかきつづけたのだが、東北院もろとも燃えうせたとか伝説もある（「源氏物語古系図」）。法成寺の良（鬼門）にたてられたから、東北院とよばれたものだが、このむかひの雲林院白毫院の南に、小野篁の墓とならんで紫式部の墓がある、とは「河海抄」にいうところ。だが謡曲「東北」では、和泉式部の墓として戯曲化をとげている（「女性と民間伝承」）。

- 紫式部舊所は、正親町南・京極西類、東北院にむかひて、はじめ藤式部といひしを、幽玄ならずとて紫式部とあらたむ。また一説に、源氏一部に紫の上の事を、すくれてかきしゆゑに、紫と号すともいへり。
 （「遠碧軒隨筆」上ノ一）

- 紫式部は藤式部なるを、源語の若紫の巻をたくみにかかれしより、当時紫式部とよぶといふ。按るに式部は、紫野雲林院の境内のほとりに、生まれしゆゑの紫式部の名なるべし。式部の産湯の井戸、真珠庵にあり。…（「余毛の硯」雪の巻・「孝経楼漫筆」巻三）

とにかくあきらかに、巻ごとのタッチは、ちくはぐしてあり、それに男文はもちろん、女文の構文法やら修辭法が、ずいぶん錯綜している。「桐壺」と「宇治十帖」とは、光源氏の未生譚・後日譚にえがきわけられて、光源氏の間間史をさしはさんでいるけれども、それが巻帙の配列の順どおりに、形成のプログラムをととのえてきたものではない。＜縦の並＞・＜横の並＞といわれている一「無名草子」・「河海抄」・「花鳥余情」・「湖月抄」—プロット編輯にしたところが、発生の遅速はときに区々としている。

いま文献学で源氏物語を三部組織にわけて、その展開のしかたも三次以上にわたるとしている。第一次は第一部の一桐壺から藤裏葉へ—33帖だが、これでさえもメカニズムを分析し脈絡をたぐると、＜紫の上系＞・＜玉鬘系＞のふたつの秩序にみちびかれてゆく。紫の上系の巻々は、桐壺・若紫・紅葉賀・花宴・葵・柳・花散里・須磨・明石・湍標・絵合・松風・薄雲・朝顔・少女・梅枝・藤裏葉の17帖、このほかにこの巻々をもつて、玉鬘系に属させている。紫の上系のあとから補綴してひとまず、現行本にみられるような有機編制に、二序をくりいれてきたものと説く。すると縦の並と紫の上系とは、なるほどに符契がひたとあう。それから紫の上系を擬して、＜原源氏物語＞と規定づける。だがこういう結論をさそひだすことができるとしても、前提条件ごとくみな紫式部が、作品化してのちの Letter Age についての事態処理でしかないであろう。それでどこまでも作品機能を、作家個性の表現に局限させている。だからどうしても問題意識は、よりさきの次元へのばさなければならぬ。紫式部が作品化するまでの Non-Letter Age に、この物語の内部発展は、どのような軌跡をくぐつてきたのであろうか。創作の場をみちびきながら、ひろがつてきた伝承動態の時空座標について、さぐりをいれてゆくことである。

- 物語などもとめて見せたまふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりをみて、つづきの見

まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。…「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」、とところのうちにいのる。 （「更級日記」）

<紫のゆかり>はヒロイン紫の上にちなむわけだが、ここはかさねて巻帙としての「若紫」をもさしている。紫の上とは蛍・藤袴・真木柱・若菜上下・鈴虫・夕霧・御法・匂宮・総角・蜻蛉の巻々でいつているが、末摘花に「紫の君」それから末摘花・若菜上下・竹河の巻では「紫のゆかり」ともよんでいる。「紫式部日記」の「あなかしこ、このわたりに、若紫やさぶらふ」は、作品「若紫」・ヒロイン「紫の上」・作家「紫式部」のモンタージュ、ところで<紫のゆかり>と名づける由緒はどこにあつたのか。

一源氏物語の若紫の巻を作れるによりて、紫式部と号く…。

（群書類従本「賦光源氏物語詩」）

源氏物語を称して<紫の物語>・<紫のゆかりの物語>、と更級日記・原中最秘抄にする。<源氏の物語>とは紫式部日記・更級日記でいつている、やはりとりわけ更級日記でもわかるように、ふたとおりのよびかたは通じていたのである。<光源氏>・<光源氏物語>・<光源氏の物語>、と紫明抄・源氏一品経・慰み草等にかきとめてもいる。文献学より紫の上系をもつて<光源氏物語>とするのであるが、すでに四十年をさかのぼつて、民俗学の立場から演繹して、折口信夫博士は犀利な洞察のもとに、そういう断案をくだしている。<光源氏物語>を<紫のゆかりの物語>としてつきとめているのだが、姫物語としての<紫の物語>から彦物語の<光源氏の物語>へ、異質の構造展開は「若紫」の巻に回転軸があることをさぐりあてた。若紫の「若」という観念内容には、より先蹤フット・タイプが存在したことも意味づけてある。式部を契機にして紫の物語のメカニズムが、質において量においてもたかい次元の光源氏の物語のシステムに、紫のゆかりは桐壺の更衣から藤壺の女御へ、それからその姪の紫の上へ。つまり三重のメタモルフォゼをつみかさねて、光源氏の物語のヒロインとしての系譜が綾なされてゆく。源氏物語の<源氏>とは臣籍に降下した賜姓皇統→王氏をさしている。他氏の藤原家の撰関職政治のときに、かつて皇統→王氏がさかえていたころを、誣うところに源氏物語の本質がある。それに現行本の源氏物語は、彦物語と姫物語とふたつともに緋い交ぜにしてある。紫のゆかりの物語というような、前代様式をうけつぐものを設定してかかると、光源氏がおもてだつさきに、藤壺→紫の上の序列を趁う説話法が、浮き彫りになつてくる。王ひこみこ→神子わかのみや→皇子ひこみこ→を主軸にすると、彦物語としての光源氏譚へ、女王ひめみこ→神女たらしひめ→皇女みまぎの路線をたどると、姫物語としての藤壺→紫の上譚へ。王は神授若子・女王が常処ひこみこ おまつわくこ ひめみこ ことお女一野宮→齋宮・齋院一の資格に即してあつたわけであるから、ふたりが交渉づけられてきた関係位相は、聖母子信仰につらぬかれた無原罪受胎譚にもとづいている。だがついに結婚等級をみだす、近新相姦おやこたわけ「天つ罪」のひとつ（祝詞式）一として、みとめてきたタイミングから、源氏物語の価値体系が創造され、「罰」の認識論をさそうようになってゆく。これが古代王朝の皇室秘話として、かたりつがれもてはやされ、破倫の藤壺事件が同一ケースの三宮事件となつてゆりかえし、三代にわたる系図小説風にととのえられたのである。

3 源氏物語のトポロジー

「ひかる源氏・かがやく藤壺」と対偶によびならわしている（「桐壺」）。「かがやく藤壺」からいざなわれて「若紫」にのびてゆく。藤壺は「かがやく日の宮ときこゆ」と本文にある。それで

「桐壺」の巻の異名を、「かがやく日の宮」ともいつている。

— ころのいとまなく、おぼしみだるゝ人の御あたりに、ころをかけて、あながちなるゆかりも、たづねまほしきころも、まさりたまふなるべし。…「恋しくも、また見おとりやせむ」。とさすがにあやふし。

手につけていつしかもみむ紫の根にかよひける野べの若草 (「若紫」)

まさしく「紫のひととゆゑに」(「古今集」巻17の867・「古今六帖」・「源氏物語」東屋)である。桐壺の「桐」も藤壺の「藤」にしても、紫だつ花であることにはかわりがない。

— …「…この軀をもわかくては、宮づかへなどせさはべりて、…越の国の司におはせし御むすめに、式部の君と申しし人の、上東門院の後(きさい)の宮と申ししとき、御母の鷹司殿にさぶらひたまひし局に、あやめと申してまうではべりし……」。

…「式部の君、たれがことにか」。と問へば、「紫式部とぞ、世に申すなるべし」。といふに、「それは、名高くおはする人ぞかし。源氏といふめでたき物語つくりいだして、世にたくひなき人…」。 (「今鏡」の序)

紫式部につかえてあやめとみずからとなえる軀が、<今鏡>の話し手→狂言回しというわけである。あやめ(菖蒲)も紫のゆかりのいろ。こういう人物設定におよぼす副意識は、やはり巧まれたプロジェクトによるのであろう。

今鏡のあやめにつらなつてゆくものに、源頼政夫人になつたときこえる伝説のヒロイン、「菖蒲の前の事」がかたられて<源平盛衰記>巻16にある。頼政にまつわる和歌功德譚のかたちをとっているけれども、そういう説話管理はもとより菖蒲の前の側にあつたようである。

— 鳥羽の院の御うち、菖蒲の前とて世にすぐれたる美人あり。…頼政、かくつかまる、さみだれに沼の石垣水こえていづれかあやめ引きぞわづらふ

と申したりけるにこそ。御感のあまりに…「これこそ菖蒲よ。とく汝にたまふなり」とて頼政にさづけさせたまひけり。…「歌の道をたしなまん者、もつともかくこそ徳をば頭はずべけれ」。…まことに頼政と菖蒲とがころざし、水魚のごとくにして無二の心中なりけり。…伊豆の守仲綱は、すなはちかの菖蒲が腹の子なり。

それにしても菖蒲の前と頼政とのむすびつきは、この歌に即して決定的な紐帯を、もつものでもなかつたのである。というわけはまったく境遇配置をかえて、

— 沙石集に、故鎌倉右大将家、都より菖蒲といふはしたものの、美人なりけるを召しください、隠しおかれしを、梶原三郎兵衛尉にたまはりしとき、

まこも草あさかの沼にしげりあひていづれあやめとひきぞわづらふ

とよめることを書せり (「倭訓栞」)

歌によつて「あさかの采女物語」のメカニックから、類縁をひいていることは理解がとどく。倭訓栞はこの伝説を考証して、

— 沙石集は無住法師が作にて、三郎兵衛尉はその兄景茂なれば、世にこのことを源頼政、ぬえを射し賞に、官女菖蒲の前をたまはりしといふは、誤なりといへり。

伊豆加茂郡河内山の堂といひしは、菖蒲このところに、尼となりて住めりといひつたへしも、「犬著聞」には河内山を仲綱の領知なりといへり。

だから頼政の恋愛譚としてでなくて、鶴退治の恩賞の件に託してかたる、パリエーションもあつたのである。尼となつた菖蒲の前についてのフォクロアは、

一 伊豆賀茂郡河内の山の堂といひしは、三位入道と菖蒲の前との木像をあがめしところなり。頼政討たれたまひてのち、菖蒲の前尼となりて、このところにひき籠りおこなひけるとなり。
(「新著聞集」六)

一 伊豆の国へいきたりけるに、…山の堂と名づく古寺あり。…仏壇の脇に法師と尼公、ふたりの木像をあらはしおきたり、…「これは頼政・あやめ夫妻の像なり。…伊豆の守正五位源朝臣仲綱と申す人、伊豆の国を知行し、…父母の菩提寺を末代にのこしおくべきとあつて、…この寺を建立し、頼政・あやめの前父母を、木像にあらわしたてまつらんと、…てづから作らしめたまひぬ」とかたる。
(「見聞軍抄」五)

のちには明和二年(1772)版の鱗形屋黒本「菖蒲前現在鶴」三卷、それから寛政四年(1742)版の黄表紙「鶴頼政名歌芝」三卷一南仙笑楚満人作・勝川春朗画一がでている。でも菖蒲の前の墓なら、伊豆とばかりもかぎらなかつた。

……蒲原郡竹ノ町村浄福寺ニアリ。源三位頼政ノ簾中ナリ。

(広文庫「越後土産」初篇)

それに蒲原郡は中世の女性唱導派「…前」・「…御前」の出自をゆるすところである。この尼は歌比丘尼たちの先蹤をあゆむ。「…前」・「…御前」は遊女名をしめすものだつたのだから、菖蒲の前もただひとりだけとはかぎらなかつたのである。とくに頼政夫人にことよせて、解釈の統一をはかつた形跡さえもある。〈恨之介草子〉にはあやめという女が、「君が代は千代に八千代をかさねつつ巖となりて苔のむすまで」、と隆達節でうたつて喝采をうけるようすをしるす。これと〈あやめぐさ〉の著者の女形芳沢あやめの芸名も、もつづくところ無縁のものではない。

あやめ(菖蒲)は「くちなはの名なり」と〈八雲抄〉にとどめている。「菖蒲者水精也」とも〈本草和名〉にいう。してみると「くちなは」が、「水精」となるわけであろう。くちなは Kutinawa がふちなは Futinawa の音価流動。ふちなはがふちなみ Futinami と同語である。蝮をくちばみ Kutibami ともいつてゐる(「徒然草」)。ふち Futi・くち Kuti はぶち Phuti からの変化で、なは nawa・なみ nami・なび nabi・ばみ bami は、蛇体表象に帰するのである。うはばみ のばみにしてもこれ…。はぶ habu・はび habi・へび hebi・はみ hami・はめhameも、ことなるところがない(「全国方言辞典」)。ぶち→ふち(淵)→ふち(藤・葛)の工程に、蛇体と藤葛との形態感覚をかよはせ、ひとつの水の哲理をうけとめてきた心意伝承に根ざす。だからふちなみのながれということは、蛇族の子孫・水精の末裔を意味している。ときとしてあやめは、「花」に民俗要因をもつにさきだつて、「根」にたもたれていたのである。根では蔓との観念聯合がひときは明瞭であろう。

一あやめぐさあさかの沼にひきつれど思ふばかりのねこそかたけれ

(「千五百番歌合」・369番)

五月五日、…あやめの長根を、おくられける返しごとに、

一君を思ふこころの底の深さにやかかる菖蒲の根をやどしけむ (「秋篠月清集」)

一あやめぐさ根ながきいのちつげばこそけふとしなれば人のひくらめ (「古今六帖」1)

これから〈恨之介草子〉で遊女あやめが、「君が代は…」をうたう所縁もたどられるであろう。菖蒲は根に水精の呪術的機能をやどしていたので、くちなはとよばれる可能性をとどめてきたのである。「今鏡」のあやめのうまれたのは、五月五日という前提にたつ。

謡曲「杜若」は女物だが、

一 シテ詞「…さすがにこの杜若は、名に負ふ花の名どころなれば、謡「色もひとしほ濃紫の、なべての花のゆかりとも思へなぞらへたまはずして、とりわき眺めたまへかし。

…シテ詞「伊勢物語にいはいく、…ある人かきつばたといふ五文字を句の上におきて、旅のこころを詠めといひければ、謡「唐ごろも著つつなれにし妻しあれば、詞「はるばる来ぬる旅をしぞおもふ。これ在原業平の、この杜若をよみし歌なり。

文政11年(1828)版の合巻本「杜若紫再咲」(かきつばたゆかりのにどぎき)6巻は、二人次郎左衛門・万寿屋八橋と角書している。はるかくだつて明治9年に近世芸能の八功神をまつり、総社号をたたえて「音律和霊神」といつたうち、小野於通の神号は「紫能名太可比売神」だつた(岩波文庫本「声曲類纂」)。ここで「紫…」をとなえてくる主導契機は、紫式部と小野於通との同族関係の確認にまつ。べつに紫明神について菅江真澄の<雪之出羽路>にかきしるしてある。また安芸の賀茂郡の安志乃山の俚伝として、あし山寺という巨剎に紫式部が詣でて、池に杜若をうえたが、いまでもその種は絶えない、と<芸藩通志>巻八にみえている。この紫式部と杜若とをむすぶモチイフから、杜若の前が文徳天皇の妃という伝承ともつながつてゆく。さすらう女流文学者の系譜がたぐられるであろう。さらに平将門綺譚にからまる桔梗の前・桔梗姫・桔梗御前も、こういう唱導派の性格序列にみちびかれているばかりか、菖蒲も杜若も桔梗もひとしなみに紫のゆかりだつた。

一紫のいろにぞ句ふ杜若ゆかりの池もなつかしきかな (「拾玉集」巻2)

一紫のいろにいではいはねども草のゆかりを忘れやはする (「二条院讃岐集」)

もと<紫>は水精一みつは・みのめ・みるめ・みぬま→みづちをさす忌詞だつた。よどみ湛えた深潭一滯一の視覚をうつす。「中臣天神寿詞」に徴験がみえるであろう。転じて「淵」のメタフォアが「藤」へ。中臣氏からの支族藤原氏がとりわけ不比等から、宮廷での聖職主宰に任じてくる。

一紫のゆゑにこころをしめたれば淵に身なげむことや惜しき (「源氏物語」胡蝶)

「藤三娘」光明皇后このかた藤原出自の高貴の女性は、「かがやく日の宮」のイメージのコロナにつつまれている(「続日本紀」天平元年8月24日立后宣命)。それを「王氏」一女源氏一に醜案・移調させ、あらたに造型化をこころみてきたのが、藤式部→紫式部の創作能力・前衛感覚ということになろう。ときに藤壺の直截のモデルは、上東門院藤原彰子にちがいない。現に<栄花物語>に「かがやく藤壺」の巻がある。清少納言が藤原定子をえがきあげたのと、方向軸においてはすこしもかわりがない(岩波文庫本「古本説話集」・「無名草子」・「河海抄」巻1・「花鳥余情」巻1・「賀茂齋院記」・刊本「世継」)。「ひかる」(光)・「かがやく」(輝)は最高至上をうたう美辞、この次級讃詞が「にほふ」(匂)・「かほる」(薫)である。そういうロゴスから作中人物を象徴づけてゆく。「源氏物語」は架空の天皇四代一桐壺・朱雀・冷泉・今上一にまたがつて、源氏および女源氏がかんでる悲愴交響樂……。「いづれの御時にか……」と正統派の説話法に準じて、条件設定はかなり紫式部のころよりさかのぼらせてある。<寛平御遺戒>から<李部王記>をへて<貞信公記>・<西宮記>の成立にわたるころであろう。だからさまざまの時事点描に徴してもフィクションがめだつ。紫式部の<ひかる源氏の物語>に対して、清少納言は<くもる藤氏の物語>をしたため、焼却処分にしてから<枕草子>をつくる、と吉野吉水社蔵落書にとどめている。いつ

ているすぢみちには矛盾があるけれども、いおうとしていることがらほうなずける。＜大鏡＞は源氏が藤氏の外戚となつたことについて、

一 世の中にはいにしへたまたまの国王・大臣、みな藤氏にてこそおはしますに、この北の政所（道長夫人倫子）ぞ源氏にて御さきはひきはめさせたまひたる。…（「大鏡」下巻）

つづけてことばを源倫子と藤原彰子とによせて、

一 春日の御前なる物の、源氏の氏寺（東大寺）にとられたるを、よからぬことにやと、これをもそのおり世の人申しし。

藤家への苛烈な拒絶精神からであろう。＜大鏡＞の端書に、「皇后宮大夫殿（源雅定）、かきつがれたる夢なり」とつけしるす。雅定は大鏡をあらわしたひとりともかぞえられ、村上源氏のながれをくむ。大鏡をうけて＜今鏡＞がいうところ、

一 藤なみのながれの、栄えたまふのみにあらず、みかど一の人の御母方には、ちかくは源氏の君たちこそ、よき上達部どもはおはすれ。堀河のみかどの御母賢子の中宮は、おほと（藤原師実）の倫子とて参りたまへれど、まことは六条（源顯房）の右のおとどの御女なり。…そのゆかりのありさま、みなもとをたづぬれば、いとやむごとくなくなむはべる。

村上のみかどの御子に、中務のみこ（具平親王）と申ししは、六条の宮とも後ノ中書王とも申す、この御事なり。…その御子に土御門のおとどと申ししは、はじめて「源」の姓得させたまひて、師房のおとどときこえさせたまひき。御身のざえも高く、文つくらせたまふかたもすぐれたまひて…はべるなり。 （「今鏡」巻7・村上源氏）

4 氏の長者譚

左大臣のむすめの中宮（上東門院）の料に調じはべりける屏風に 右衛門督公任
一紫の雲とぞみゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらむ きんとう

（拾遺集巻16の1069・「前大納言公任卿集」・「玄々集」・「新撰朗詠集」・「今昔物語」巻24の33）

この歌が＜栄花物語＞かがやく藤壺の巻の展開軸になつている。光源氏のモデルとして部分的にはあるが、公任もとりこまれている。

一紫はなべて位のいろなれば濃きも淡きも上衣なりけり （「古今六帖」）

陽明門院はじめて后に立たせたまひけるを聞きて

一紫の雲のよそなる身なれども立つと聞くこそうれしかりけれ （「後拾遺集」巻7の460）

王朝のころ紫は禁色だつた。染色処理が舶来技術だつたから、「紫の名高の浦…」（「萬葉集」巻7の1392）とつづける序詞構成をみちびき、「…袖のみふれて寝ずかなりなむ」へひるがえす表現法もさそつてゆく。易の乾卦の上九は天皇位をかたどるので、日本紀には＜天皇霊＞（すめみまのみたま）を、＜乾霊＞ともかきとどめてある。乾霊が＜天皇身＞（すめみま）にふりつかなければ、＜天皇位＞（あまつひつぎのみくらい）に即くことができなかつた。天皇位に対して色を配てるのに、紫をもつてしている。だから唐制を模して、紫門（「孝徳紀」白雉元年の条）・紫宮（「元明紀」和銅元年の条）・紫庭（「続日本紀」仁明天皇承知7年6月の条）・紫微宮（「三代実録」清和天皇天安2年8月27日の条）ともいつている。紫宸殿は大極殿一紫宸北極→紫極一、この中央に高御座がある。＜延喜式＞によると天皇の衣笠は、伊勢神宮ともどもに紫である（「祝詞考」）。

一紫の色濃きまでは知らざりき御代のはじめの天の羽衣 (「拾遺愚草」)

もちろん坤卦の上六は皇后位だが、ひとしく紫をあてていた。唐制では後宮を紫房といっている。

一紫の匂ふ藤波うちはへて松にぞ千代のいろは(イ、も)かかれる

(「朝忠集」・天徳4年内裏歌合九番)

一紫のいろの深きは水底にみえつる藤の花にざりける (「躬恒集」)

一紫の雲のしるしの花なれば立つ日も同じ岩の藤波 (「拾遺愚草」)

一紫の雲うちなびく藤の花千代の松にかけてこそみれ (「兼盛集」)

「紫の雲」は皇后位をかたどり(「八雲御抄」)、藤をもつて象徴させてある。そこで<紫のゆかりの物語>は、御名代部→私(后)部の伝承系譜に、属することをうかがわす。

源氏物語は中篇小説と歌物語とが統合・複融してきた結集版である。中篇小説は「家」をセツテングにして、さる人物の一定期間の行動、ある事件にからむ哀歎抄をあつかう。古代の家々の纂記でのちの本系帳式のもの、それから国々の語部がもつ実録風のたぐいの脈理をひく。源氏物語の<縦の並>というのにあたっている。それで逸話を骨子とした<横の並>は歌物語の序列から、日本文学の彦物語と姫物語とでは、性別による管理工程がちがう。藤式部→紫式部がととのえてきた女房文学より以前に、たぐつてみると弁の尼・小野の尼というような一たとえば「紫の尼」とでも名のる一女性俗人が、姫物語をたずさえて回っていたのである。紫式部は姫物語としての<紫のゆかりの物語>を、かきとどめたのにちがいない。したがって現行本の<光源氏の物語>の芸術組織は、紫式部より以後の形成にもとづくことになるであろう。

<光源氏の物語>は王氏の長者譚である。それには<貴種流離譚>を前提としている、スタイリングまでも定型律どおり。須磨・明石の巻を契機にして、いちじるしく光源氏の人間発展がめだつ。青春像を理想化させるためには、副因与件として彷徨・漂泊・遍歴のプログラムが要る。禁忌を犯して「天つ罪」をあがなうかたちにととのう。これが悟性的になれば、色懺悔物へおもむくのである。しだいに長者譚にハイライトをあつめてきたので、小説の機能からは効果的な技法というより、とらねばならぬ呪術的宗教的な生活法として、聖職付与にいたるまでの試練のプロセスをうつしだす。まして氏の長者譚では人物去来の経緯が、家および家格に集注されてくる。ふたつの家格がせりあうのは、その家にまつわる精霊たちのたたかひにある。氏の上ふたりのあらそいをめぐつて、ともにするどく対決している家霊を、どうさばきとりあつかわれるか、ここにすこぶる社会関心がかかっていた。閥族史観が物語の主題にもちいられると、<もののけ>一御霊・生霊・怨霊・死霊・悪霊一さえも血縁・地縁をひいてうけつがれてゆく。と同時に氏の上を規定づける一次条件は、<色好み>をもつて実質概念とするようになる。こういう人間エネルギーは、どこからどのようにして、具象化してくるのであるか。窮極のところ<たま(霊)>の発現作用にある。からだにほかの霊をふりつけてくれればるほど、人(→神・家)格はひろがりをもち徳望がふえてゆく。それに女人は他家の霊媒質とみなされていたので、結婚によつて異系列の家霊をこちらにおびきよせ、あわせて支配のもとにおけるという事態になろう。この可能経験をくりかえすにつれて、量から質への価値転換をくわえつつ、人格一霊威・権勢一の増大をとまなうのである。大國主命とか仁徳天皇とか名詮自性ともにしめしている。これが<色好み>の基本テーゼであり、そういう伝承典型としての光源氏でもある。

さらには<たま(霊)>にからみついている、もうひとつの問題意識は、<たから(財)>につな

がつている。女人—ことに王氏—には資産がうしろについているのである。六条院は六条の御息所の舊邸だつたし、女三の宮には朱雀院とこれをまかなう荘園がある。六条の御息所が生霊・死霊となつて、光源氏にしつこくたたるのは、御息所の財たからだつた六条院を、光源氏がうばつたからでもある。御息所が年上の女—姉女房—としての、うたからわなりねたみのためばかりではない。のちほど六条の御息所の生霊をえがきだす謡曲「葵の上」、またそれが死霊として魔道にくるふ謡曲「栴天狗」が、かすかにではあるけれども、このトポロジーにせまつている。光源氏が女三の宮をあずかるようになる心理の綾には、朱雀院ぐるみ周辺にあるものをねらつていたことは否めない。光源氏の個有に属するのは二条院だが、ところでこの理財家の稟賦ひんぶをひらめかす敘述が現にある。

一さぶらふ人々よりはじめ、よろづの事みな、西の対（紫の上）にきこえわたしたまふ。領じたまふ御庄・御牧みよらみまきよりはじめて、さるべきところどころの券けんなど、みなたてまつりおきたまふ。それよりほかの御倉町・納殿みくらまろ ぬらだのなどという事まで、少納言せうなごんをはかばかしきものに見おきたまへれば、親しき家司けいしども具して、知らしめすべきさまものたまひ預おつく。（「須磨」）

だから愛と財と形而の上下ふたとおり—恋愛譚と富貴譚と—にかけて、色好みの理想像のロマン展開えが彫りつけられてゆく。